

焼津市の通級指導教室(ことばの教室・まなびの教室)の担当者として、多くの子ども達を支援してこられた荒井久美子先生に、特別支援教育で大切にしたいことや、一人一人の特性に応じた支援のヒントについて、わかりやすい言葉で書いていただきました。



「小さな変化を喜び合おう」

通級指導教室には、さまざまな特性や課題をもつ子ども達が通ってきています。子どもの一挙手一投足に振り回されることもあります。子どものほんのわずかな変化に喜びを感じる瞬間もあります。

他校から通ってきている4年生の男の子、自閉症傾向のあるお子さんです。コミュニケーションがうまくとれないことで自分が困ってしまう場面が多かったお子さんです。

指導後の見送りの場面の様子です。

通級一年目の年。事務室前で「さようなら」をする時、目が合いませんでした。また、お迎えにみえたご家族と私が話し込んでいても、児のタイミングで「さようなら」を言うので、(送迎者との)会話の途中で割り込む形でのあいさつになっていました。そして、「さようなら」をした後は、絶対に振り返ることなく車に乗り込んでいました。

通級二年目の年度末。指導の終了が近づいてきたころのことです。事務室前での本見の「さようなら」の仕方が変わったことに気付きました。「さようなら」を言う前に、目と目が合います。相手のタイミングを見て「さようなら」を言うようになっていました。そして、「さようなら」をした後に、後ろを振り返りながら手を振る姿が見られるようになっていたのです。車に乗る前に手を振り、車に乗ってから手を振り、車の中から手を振り……。今までには、全く見られない姿でした。

そんな本見の帰る姿を見て、成長を感じるとともに、「幸せ」「心地よい」ぴったりの言葉が思い浮かばないのですが、いい気持ちになった私がありました。



たかが、そんなことと思われるかもしれませんが、通級指導教室の担当者となって知ることでできた喜びが今までにもたくさんありました。

通級指導教室に通ってくる児童には、発達の凸凹ともいわれる特性をもっているがために、ほめられる回数より、注意されたり怒られたりする回数の方が多いうちの子が少なからずいます。そんな子ども達の小さな変化に気づき、価値付けし、支援にかかわっている多くの方と共有することが、通級指導教室担当者の役目の一つであると思います。

通級指導教室担当となって、今まで見えていなかったことや今まで見ようとしていなかったことに、目が向くようになりました。